



▲気持ちを全身で表現する吉用凌平生徒会長

福間中学校新校舎完成記念式典 地域の新しい歴史の始まり

福間中学校新校舎完成記念式典が、4月23日に福間中学校新校舎中庭の「であいの広場」で行われました。「学校を建ててくれた感謝と初めて見た気持ちを忘れない。新校舎を次の世代に新しい歴史としてつないでいきたい」と生徒を代表して、吉用凌平生徒会長から力強い挨拶がありました。式典後の内覧会では、音楽室で吹奏楽部の演奏も披露され、音抜けの良さに参加者は驚いていました。バリアフリーにも配慮されており、生徒だけでなく、地域の人々にもますます愛される学校になることを大いに期待させてくれました。



▲採集した菜種 ▲菜殻に着火すると瞬間に立ち上がった炎

菜の花の種の収穫と菜殻火 次の春も花いっぱい

3月に見頃を迎えていた新原・奴山古墳群の菜の花が時期を終え、5月7日に菜の花の種の収穫を行いました。集まった勝浦郷づくり推進協議会と市職員のおよそ50人は、刈り込まれた菜の花から種を採集。ふるいに掛けた菜の花を唐箕掛けするなど、約1時間かけて作業。その後、菜の花殻を焼く「菜殻火」を行いました。津屋崎中学校歌にも登場する「菜殻火」。勝浦地域の人の話では、以前はこの辺り一面菜の花で黄色に染まっていた、あちらこちらで菜殻火をしたり、菜種油を作って蓄えていたりしたそうです。

津屋崎千軒民俗館藍の家 築120年記念講演会 たくさんの人々がつないできた まち並みと藍の家

津屋崎千軒民俗館藍の家(以下、藍の家)が築120年を迎えたことを記念して、3月19日と4月23日に講演会が開催されました。3月19日には、藍の家が平成19年に国の有形文化財に登録された際に尽力いただいた、長崎総合科学大学教授の山田由香里さんが藍の家の歴史や建物としての素晴らしさを解説。4月23日には、九州大学名誉教授などを務める藤原恵洋さんが津屋崎と関わるきっかけとなった、津屋崎千軒街並み保存協議会事務局長を務めていた柴田治さんが突然訪ねてきた話や、世界各国を周りながら建築を学んできたことなどを話しました。

その後、まち歩きをしながら津屋崎千軒内の古民家を参加者とともに見て回り、建物の貴重さなどを参加者に伝える藤原さん。これまでまち並みを残し、つないできたことの素晴らしさを参加者の皆さんが実感する1日となりました。どちらの講演会にも築120年をお祝いしようと集まった人々が藍の家中に所狭しと入り、立ち見客が出るほどでした。山田さんは「今の藍の家があるのは集まった人たちの力。この人たちがいなかったら90歳から120歳はなかった。藍の家に続く、次の登録文化財が福津市に生まれてくれたら」と話していました。



▲古いけれど新しいまちづくりができる建物だと話す山田さん



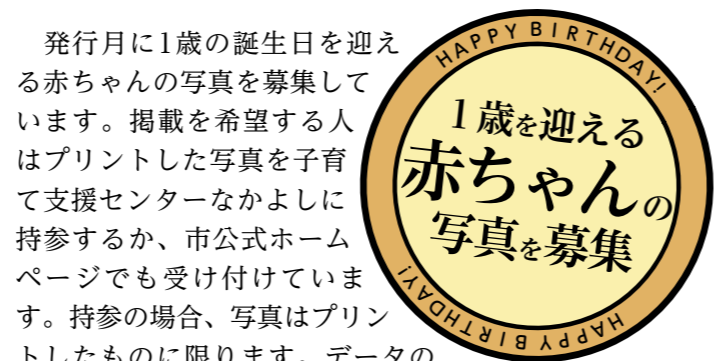
▲九州大学在学時に描いた津屋崎漁港のスケッチを披露する藤原さん

発行月に1歳の誕生日を迎える赤ちゃんの写真を募集しています。掲載を希望する人はプリントした写真を子育て支援センターなかよしに持参するか、市公式ホームページでも受け付けています。持参の場合、写真はプリントしたものに限りません。データの持ち込みは受け付けられません。

毎号先着24人で、9月生まれの赤ちゃんは7月21日(木)が受付期限です。

受付、問い合わせ
市子育て支援センターなかよし(ふくとぴあ)
☎35・8382
休館日
月曜日、第2土曜日とそれに続く日曜日、祝日

▶写真申込フォーム



「なおりおプロジェクト」と「ふるさとプロジェクト」 福津の新しいお土産品ができました

祭りの後、神酒・供物を下げて参加者が分かち合い飲食する宴会である「直会」を語源とし、この商品を通して交流のきっかけをつくってほしいという思いを込めた「なおりおプロジェクト」で2つのお土産品が誕生しました。このお土産品は、ケーキハウスアン福津店などで販売しており、市内で昭和初期から続いている製菓所のつぶ館を使用。宮地嶽神社の門前町で販売されている松ヶ枝餅には、この製菓所のつぶ館を使用している店もあり、福津の文化を支えています。これだけでなく、株式会社JALUXのふるさとプロジェクトでも新たなお土産品が誕生。株式会社JALUXと株式会社風美庵、福津市の共働で福津産の蜂蜜と米粉を使ったチーズサンドを開発しました。このチーズサンドは、お魚センターやふっくる、福岡空港や羽田空港でも販売されています。



▲伝統の館を使用したクッキーとパウンドケーキ



▲深みのある熟成チーズの味わいを楽しめます